

**「国家と音楽家」 中川右介 著 集英社文庫 2022年2月発行**

専門分野(数学)関連の本は、スルーする学生も少なくないかも…ということで、数学とは別の、個人的趣味の分野に関する本を紹介させていただきます。

大学するとき、所属していたサークル(北大交響楽団)で、ショスタコーヴィッチの交響曲第5番、通称「ショスタコの5番」「タコ5」を演奏したことがあります。当時はロシアもウクライナもベラルーシもバルト三国もみんなまとめて「ソビエト連邦」で、タコ5はロシア革命の民衆の歓喜を表す作品と解釈されていました。一方、当時「西側諸国」でのみ出版されていた「ショスタコーヴィッチの証言」という本があり、そこにはこの曲は「強制された歓喜」を表したなど、作曲者が言い残したとされる反体制的な証言がてんこ盛りでした。演奏したのはゴルバチョフ書記長の時代でしたが、ショスタコはそれ以前の、指導者による監視や検閲の厳しい、真実も語りにくい体制下で生涯活動した作曲家でしたので、偽書という説もあるこの本も、あの頃は結構真に受けて読まれていました。ソ連はとにかく情報統制が厳しく、政府の要人が死去すると、アナウンスもなく突如、終日重いクラシック音楽ばかりの放送が流れ、数日後に公式発表というのがお約束でした。チェルノブイリ原発事故も、公式発表したのは、事故が起きてから何日も経ってからでした。他にも妙なところいろいろあり、例えば、ゴルバチョフ政権の末期に、とある音楽団体の手伝いでソ連を旅行したことがありますが、書店以外の一般の商店は品物がほとんどないという状態なのに、ドルなどの外貨で支払うベリョースカという店には品物が揃っていたり、通貨の交換レートが換金所とベリョースカでは十倍以上も異なったりしていました。

西洋ではクラシック音楽は、政治と大いに絡みあっています。最近では、ロシアのウクライナ侵攻から、ロシア系作曲家の作品の風当たりや、プーチンを支持するロシア系指揮者の解任などが見られます。作曲家のワーグナーは反ユダヤ的思想があった上、ヒトラーがワグネリアンだったため、イスラエルでは今も、ワーグナーの曲の演奏はタブーです。日本をはじめ世界各国で演奏した指揮者のカラヤンも、イスラエルには招かれませんでした。ナチス政権下のドイツでは、メンデルスゾーンやマーラーがユダヤ系という理由で、彼らの作品の演奏を禁じていました。日本では「ピアノの神様」などともいわれたピアニストのアルフレッド・コルトーは第2次世界大戦中、フランスのヴィシーに樹立されたナチスの傀儡政権と関わったため、戦後はフランス国内での演奏の機会を奪われました。ちなみに、自動車メーカーのルノーが戦後半世紀にわたり国営企業だったのは、ときの社長がこの政権に協力したことによるペナルティです。旧ソ連では、帝政ロシア国歌が演奏禁止でした。帝政ロシア国歌の旋律が曲中に使われているチャイコフスキーの「スラブ行進曲」や「1812年序曲」は、ソ連では第三者の改竄かいざんによって旋律を消したり別の曲に差し替えたりして演奏されました。当時ソ連で出版されたこれらの楽譜を私は持っていますが、やはり改竄されています。日本でもアジア・太平洋戦争のとき、当時の音楽雑誌で堀内敬三らが、米英の作曲家の作品を敵性音楽として読者に排斥を呼びかけていました。

この本では、ショスタコやコルトー、カラヤンをはじめ、指揮者ではトスカニーニやフルトヴェングラー、チェコスロバキア(当時)のアンチェルやノイマン、演奏家ではチェロ奏者のカザルスやピアニストのパデレフスキーなど、20世紀以降の政治体制の影響を受けた作曲家や演奏家について取り上げています。2度の世界大戦やドイツのナチス政権、スペインの内乱、ソ連のスターリン独裁、チェコ動乱などが、その土地でリアルタイムに活動していた音楽家にどのように影響を与えたのか。これを読むと、音楽家という立場から現代史を理解することができます。巻末には関連する音源(CD)も紹介されていますので、それらをあわせて聴いてみるのもいいかと思います。